

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 文明の「暦」史観： 太陰暦、太陽暦、太陰太陽暦の相克と共存

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中牧, 弘允 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/4345">http://hdl.handle.net/10502/4345</a>

文明の「暦」史観——太陰暦、太陽暦、太陰太陽暦の相克と共存

中牧弘允

第二部 文明史観の新展開

なかまき ひろちか ● 国立民族学博物館・総合研究大学院大学教授。

1947年、長野県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。文学博士。専攻は宗教学、経営人類学、ブラジル研究。近著に『カレンダーから世界を見る』、『会社のカミ・ホトケ——経営と宗教の人類学』、*Japanese Religions at Home and Abroad: Anthropological Perspectives*、梅棹忠夫との共編著に『宗教の比較文明学』など。

## 一 曆に潜む文明の姿

人にはなぜ曆が必要なのか

わたしたちは毎日、カレンダーをながめて暮らしている。また、カレンダー付きのメモ帳をポケットやバッグにしのばせている。その主要な目的は日付を知るためである。あるいはカレンダーにしたがって自分の行動計画を立てるためである。しかし、カレンダーの役割はむしろ個人の都合をこえたところにある。

いまでも結婚式には大安がこのまれるし、葬式には友引を避ける。欧米では一三日の金曜日は不吉な日とされる。中国でも縁起をかついで八月八日にオリンピックの開催日をさだめた。日本で日の吉凶や運勢を占う易学や陰陽道が発達したのも、ことをなすのにふさわしい日と、そうではない日とを判別するためである。曆は日付（曆日）を知るといっても、日にちの良し悪し（吉凶）を判断することに重きがおかれていた。曆の語源を「日読み」とし、宗教的職能者の聖を「日知り」とする日本民俗学の知見もゆえなしとしない。日を読んだり、日を知ったりするのは、宗教的な意味あいが強かったのである。

そのように、個人の都合とはおよそかけはなれたところで曆はつかわれていた。日本が中国の曆を正式に採用したのは七世紀末だが、こよみのはかせ曆博士のつくる翌年の曆は一月に天皇に献上されるとともに、天皇から諸官司や地方に頒布され、行政の基準となった。つまり、行政文書に記される日付としての役割をもち、全国にわたる律令体制を時間的に統合していたのである。漏刻とよばれた水時計がつくられ、時を知らせていたのも同時代のことである。のちには占星台も建造され、

\*1 元嘉曆は六朝時代の南宋の曆法。何承天が編纂し、445年から実施され、百済を経て導入された。

\*2 儀鳳曆は唐朝の曆法で、李淳風が編纂し、中国では麟徳曆とよばれていた。

天体の運行から年月日が予知され、その吉凶を占っていた。これらの業務は陰陽寮の管轄とされ、そこが天文・陰陽・暦法・漏刻をつかさどった。国家統治、つまり行政のために暦は必要とされ、七二〇年に完成した『日本書紀』では神武天皇紀以降の記述にはすべて日付が書き込まれている。

古代日本の律令体制は唐に学んだ行政システムである。暦法も中国からそっくりそのまま導入された。「元嘉暦」<sup>\*1</sup>や「儀鳳暦」<sup>\*2</sup>がそれである。日本が中国文明圏に巻き込まれたことをこれらの暦は実証している。とすれば、暦は文化や文明を知るためのものではないが、暦をとおして文化・文明を知ることができる。<sup>\*3</sup>

世界四大文明とよばれる古代文明がある。エジプト文明、メソポタミア文明、インダス文明、黄河文明であり、暦については詳細不明のインダス文明以外、みなそれぞれに独自の暦をもっていた。これにメソアメリカ文明とアンデス文明をくわえて六大文明と称することもある。前者では「マヤ暦」<sup>\*4</sup>や「アステカ暦」<sup>\*5</sup>が知られているし、後者では冬至と夏至を基準とする太陽暦がつかわれていた。このように文明にはかならずといってよいほど暦法が存在し、統治に役立てられ、人びとの生活を律していたのである。

### 多様な暦の背景にあるもの

暦は文明の重要なツールである。コンピュータのOSにたとえれば、ウインドウズやマックOSに相当する。しかも、統治と不可分の関係にあった。OSのないコンピュータが存在しないように、暦をもたない文明をかんがえることはできない。その意味で、歴史観ならぬ「暦」史観は十分に成立するはずである。

\*3 中牧弘允『カレンダーから世界を見る』白水社、2008年。このほかにも以下の特集は同様の視点から編集された。『国際交流』99号（特集「考暦学ことはじめ」監修 中牧弘允）国際交流基金、2003年。『民博通信』109（特集「マルチな暦を生きる——カレンダーにみる在日外国人のくらし」責任編集 中牧弘允）国立民族学博物館、2005年。『アジア遊学』106（特集「カレンダー文化」）、勉誠出版、2008年。以下の記述はこれらの文献を参照したところがおおい。

暦は大別して太陰暦、太陽暦、太陰太陽暦の三つに分けられる。言うまでもなく、太陰暦は月の満ち欠けの周期（朔望月）の約二九・五三〇六日を基準とし、太陽暦は太陽の回帰年の約三六五・二四二五日を一年の単位としている。太陰太陽暦は双方ともサイクルに端数がでる太陰暦と太陽暦の組み合わせで成り立っている。そのほか雨季や乾季、雪形や開花、動植物の出現などにもとづく自然暦とよばれるものもある。他方、季節や天文とは関係なく、中国発祥の干支にみる六〇をサイクルとする暦や、インドネシアのバリ島の「ウク暦」のように一巡二二〇日（七日×三〇ウク）の周期をもつ暦もある。

古代文明において太陰太陽暦を採用していた地域としてはバビロニア、ギリシャ、ローマ、インド、中国などをあげることができる。太陽暦はエジプトやエチオピア、イラン（ペルシャ）でつかわれ、メソアメリカやアンデスでもそれに近い暦が知られていた。「ユリウス暦」はエジプトの太陽暦に範をとった暦法であり、今日の「グレゴリオ暦」に継承されている。他方、純粹の太陰暦はイスラームの採用するところとなった。しかし、中国文明圏やインド文明圏では太陰太陽暦が依然として勢力を温存している。

ところで、現代の暦法の分布は宗教の勢力図とかなりの程度に重なり合う。ユリウス暦は東方正教、グレゴリオ暦はカトリックとプロテスタントが採用しているところから、キリスト教と不可分である。しかし、いつもキリスト教を意識しているわけではない。イスラームの「ヒジュラ暦」は太陰暦であり、イスラームのひろがりに対応して分布している。他方、インドと中国で発達した太陰太陽暦はそれぞれの文明圏に伝播し、ヒンドゥー教や中国思想（干支、陰陽五行説、易学など）と密接につながっている。こうした関係をもうすこし歴史をさかのぼって仔細に検討してみよう。

\*4 マヤ暦には長期暦と循環暦があり、前者は20進法による5つの単位を用いて暦元から直線的に時をはかり、後者には1年のサイクルを260日とする暦と365日とする暦とがある。

\*5 1790年にメキシコシティで発見された「アステカの暦石」が有名である。

## 二人間の叡智と工夫を包みこんだ曆史

### 曆史の誕生

曆の發生をさかのぼっても、いわゆる自然曆と太陰曆・太陽曆のどれが先行していたかは、いまのところ判断がつかかねる。三万年前のクロマニヨン人はワシの骨に月齢らしきものを刻んだ痕跡を残しているし、<sup>\*10</sup> ナイルの民も有史以前から川の増水期と渇水期を農耕の目安としていた。しかし、曆の發達をみると自然曆は正確さの点で太陰曆・太陽曆に劣り、歴史の舞台からしだいに消えていった。残ったのは月や太陽にもとづく曆法である。

月の満ち欠けの周期を一月とし、一二か月を一年とする曆法は世界各地で誕生した。たとえばチグリス川とユーフラテス川のながれるメソポタミアに文明を形成した古代シュメール人は太陰曆をつかっていた。しかも、太陰月を三〇日とすることにより一年を三六〇日とした。そして、一日を二四時間に分けた。その文明を受け継いだバビロニア人はさらに昼と夜をそれぞれ一二時間に分けた。こうして一二の倍数である二四、六〇、三六〇からなる曆法が完成した。一週七日の七曜もここが発祥の地である。これをうけて旧約聖書「創世記」の冒頭の物語がつくられ、天地創造の作業は六日間で完成し、七日目は聖別されて安息日となった。

古代中国では六〇を周期とする曆法がつくられた。十干と十二支の組み合わせからなる干支である。干支は殷代（紀元前一六世紀頃）—一世紀頃）に完成し、年月日に使用されていた。また殷代にすでに閏月（うるふ）がもちいられていたことから、太陰太陽曆が完成していたことがうかがわれる。

\*6 一巡（1年）が210日の曆。7日を一まとまりとし、30種類のカクがある。

\*7 ユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザー）が紀元前46年に制定した太陽曆。

\*8 グレゴリオ13世が1582年にユリウス曆をもとに修正した曆。現行の西曆のこと。

他方、太陽暦を最初に採用した古代文明はエジプトであるといわれている。紀元前四〇〇〇年頃、ナイルの民は三〇日からなる一二か月と五日をくわえた三六五日を一年としていた。余分の五日はオシリス、イシス、ホルス、ネフティス、セトの神がそれぞれ生まれた日とされていた。そして、恒星のシリウスが太陽とともに東の空にあらわれる日を元日とし、その日を祝していた。しかも、シリウスの出現を正確に測定しているうちに、太陽年が三六五日より約四分の一（六時間）ながいことに気づいていたのである。

古代インドではヴェーダ<sup>\*11</sup>の補助学として暦法は位置づけられ、祭式の日付を決めるためにつかわれていた。暦法は紀元前五世紀頃には成立していた。ここではユガ<sup>\*12</sup>とよばれる周期のなかに暦日数と朔望月数をあたえることを基本としていた。また、インドの天文学では「年」とは太陽の回帰年ではなく、恒星の回帰年を意味していた。そうした事情から、インドの暦は基本的には太陽暦であるが、正確には太陰恒星暦というべきものであり、きわめて複雑な様相を呈するようになった。

メソアメリカのマヤには一年が二六〇日の宗教暦と、一年三六五日の暦があった。それ以外にも九日周期の暦があり、その三つを組み合わせてつかっていた。さらに、二〇進法をもちいるマヤでは二〇×一八〓三六〇を一年とするトゥンという「年」をもっていた。三六五日暦では紀元前三一四四年九月六日を暦元の日とさだめていた。そこからひとつの「暦」史がはじまったのであるが、実際のマヤの歴史は紀元後三世末から一〇世紀はじめまでが中心である。また、暦の日付はもっぱら王の即位とか戦争などの歴史を石造のモニュメントにするためにつかわれていた。三六五日暦は太陽暦にちかいが、厳密な太陽暦をめざしていたわけではない。ちなみに、三六五日暦の現在

\*9 ムハンマドがメッカからメディナにのがれたヒジュラ（聖遷）の年（西暦622年）を紀元とする太陰暦。

\*10 デイヴィッド・E・ダンカン『暦をつくった人々』（松浦俊輔訳）河出書房新社、1998年、25-28頁。

の大周期の終わりは二〇一二年二月二日（ないし二三日）にやってくる。マヤ暦の終末である。

### 神と不可分の関係にある暦——「ユリウス暦」と「ヒジュラ暦」

暦の変遷としての「暦」史において、革命的な転換はふたつある。ひとつはローマにおける太陽暦、つまりユリウス暦への改暦であり、もうひとつはイスラームによる太陰暦の採用である。ユリウス暦からグレゴリオ暦への改暦はこれらにくらべると小事件にすぎない。

ユリウス・カエサル（ジュリアス・シーザー）とクレオパトラとの遭遇は「暦」史をおおきく変えた。エジプトの太陽暦の存在を知ったカエサルは、閏月の入れ方が神官の特権になっていたローマの太陰太陽暦（ヌマ暦）を廃し、紀元前四六年に太陽暦の採択に踏み切った。そして一年を三五・二五日とさだめ、四年に一度、閏日を二月の末に一日おいた。また年始を三月に代えて一月とさだめた。ただし、この年だけは九〇日の閏日を挿入し、太陽暦との調整をはかった。ユリウス自身はこの年を「最後の乱れた年」とよんだが、人びとは政治の「乱れた年」として記憶した。とはいえ、ユリウスの功績をたたえた元老院は第五の月（クインティリウス）をユリウス（Julius）に変更し、以来その名にちなみ、たとえば英語では「July」とよばれるようになった。甥で養子のアウグストゥス（Augustus）も初代の皇帝となったことで、元老院は八月をかれにささげた。英語でAugustとよばれる所以である。ただし、それ以外の月名にはヤヌアリウス（一月、双面の神）など旧来の月名がそのままつかわれ、セプテンベル（第七の月、九月）以下には、三月から数えるローマの習慣ものこされた。

ユリウス暦は、ローマ帝国の版図の拡大にともないヨーロッパ全土にひろがった。ローマ帝国

\*11 インドの古典文献でバラモン教の聖典。

\*12 インドの暦法にもとづく5年の周期。



のもとで迫害を受けたにもかかわらず、三九四年には帝国の国教となったキリスト教もユリウス暦を採用していた。後にローマ帝国は東西に分裂し、西ローマ帝国はカトリック、東ローマ帝国は東方正教というちがいはあったが、ユリウス暦は共通して使用された。

ところが、ユリウス暦には致命的な欠陥があった。というのも、一年を三六五・二五日としたために実際より一分ほど長く、積年の累積が無視できなくなつたからである。ようやくローマ法王グレゴリオ（グレゴリウス）一三世のもとに改暦委員会が設置され、一五八二年にいわゆるグレゴリオ暦に改暦することになった。その眼目は、ユリウス暦では四年に一回めぐってくる閏日を、四〇〇年に一度だけもうけないというものである。つまり、一〇〇で割り切れ、四〇〇で割り切れる年には閏日をくわえないことにしたのである。同時に、早くすすみすぎた一〇日を空白とした。すなわち一五八二年一〇月四日の次の日を一〇月一日とさだめたのである。

このようにグレゴリオ暦は若干のバリエーション・アップしたユリウス暦ではない。現に、イタリア、フランス、スペイン、ポルトガルなどのカトリック諸国はただちにグレゴリオ暦を採用したが、ドイツやイギリスなどのプロテスタント諸国は一八世紀の中甸になってようやく全面的に受け入れたほどである。東方正教の国々は二〇世紀になってしだいにグレゴリオ暦に切り替えていったが、東方正教会の儀礼ではいまでもユリウス暦を採用しているところがおおい。

ユリウス暦、グレゴリオ暦の伝統に本格的に対抗したのはフランス革命暦である。アンシャン・レジームの打倒をめざし、過激な施策が実行に移された。革命暦、ないし共和暦もそのひとつである。しかし、性急過ぎたことと、北フランス中心だったため、一二年ほどで挫折した。それを旧（グレゴリオ暦）に復したのは皇帝ナポレオンである。

日没にはじまり、日没に終わるヒジュラ暦の一日

メッカからメディナに逃避（聖遷）したムハンマドは死の約一年前（西暦六三二年）、メッカへの最後の巡礼に出かける前、信仰のあかしとして純粋な太陰暦の採用に踏み切り、メッカで使用されていた太陰太陽暦との対決姿勢を明確にした。紀元をヒジュラ（聖遷）の年とさだめたのはムハンマドではなく、第二代カリフのときである。ヒジュラ暦はイスラームの伝播にもなつて普及し、その礼拝や断食を厳格に律している。

アラビア半島ではヤスリブ（後のメディナ）に住むユダヤ人から学んで、西暦四一二年から太陰太陽暦がつかわれていた。それは第一三番目の月を挿入する置閏法<sup>ちじゅん</sup>で、メトン周期<sup>\*13</sup>として知られる一九年七閏法にもとづいていた。これは、そもそもバビロニアの暦法をつぐものであった。

アラビア半島での特徴は古代から神聖月をもうけ、四か月間は戦争や略奪のための遠征をおこなわないととりきめていた。神聖月は第一番目、第七番目、第一一番目、第二一番目だったので、一月から一月までの三か月間が連続していた。しかし、それを不都合として一月を二月に振り替える習慣がおこった。また、第一三番目の閏月を神聖月にあてることをした。イスラームはそうした習慣を不信仰な行為として廃止し、ラジャーブ（七月）と連続する年末年始の三か月をあらためて神聖月とさだめ、「神聖月には悪をなすなかれ」といましめた。ただし、その一方で、不信仰者に対する攻撃はどの月でもかまわないとの啓示もくだつている。

ムハンマドとおして語られた啓示によると、月は一二か月であり、三日月から三日月がひと月とされた。したがって、新しい日にはいるのは西の空に三日月（糸のように細い三日月）であり、

\*13 アテネの天文学者メトンが紀元前5世紀に提唱した周期。19年に7回閏月を入れて調整する太陰太陽暦の置閏法であり、古代のバビロニアや中国でも使用されていた。

三日目の月ではない)が見えたときであり、古い月が終わるのも三日月を確認したときである。そのため一日は日没からはじまり、つぎの日没で終わるのである。断食月(九月)の場合も、夜空に細い月が肉眼で見えた翌朝から断食をはじめ、仮に見えなかったときは、その翌々日から開始される。判断するのは高位の聖職者である。断食月の終了も同様である。そして、ひと月は二九日(偶数月)と三〇日(奇数月、および閏月の一二月)からなり、一年は三五四日ないし三五五日(閏年)である。閏年は約三〇年に一回めぐってくる。

ムハンマドはメッカで啓示を受け、預言者としての自覚をもって宗教活動をはじめたが、巡礼地として栄えていたメッカの最有力氏族であったクライシユ族から迫害され、数百人の信者とともに北方約四〇〇キロメートルの町メダイナに移住した。ヒジュラ暦はこの年(西暦六二二年)を紀年とする暦法であり、ムハンマドの死後七年目に二代目のカリフであるウマル一世よって制定された。

イスラームの一日五回の礼拝も太陽の運行と関係はするが、きつちりと日出と日没、あるいは正午にさだめているわけではない。むしろ、そうした厳密性は不信心者のおこなってきた行為としてしりぞけられている。

イスラームではこのように信仰の発露として太陰太陽暦を廃し、厳格な太陰暦を採用した。したがって、ヒジュラ暦は本来の性格として宗教暦といえるものである。他方、ユリウス暦は聖職者の特権をうばって帝国支配の手段として断行されたものであり、基本的には世俗的な性格が強い。しかもグレゴリオ暦とヒジュラ暦はそれぞれ太陽暦と太陰暦を代表するものである。キリスト教世界とイスラーム世界の対立や相克は「暦」史的にみても、興味ぶかいテーマとなるはずである。

### 太陰太陽暦の巻き返し——暮らしを彩り、文化を育む暦

バビロニア起源の太陰太陽暦は、イスラームによつてほぼ消滅の憂き目にあつた。わずかにその伝統を継承しているのは「ユダヤ暦」\*14である。ユダヤ教の行事はいまでもユダヤ暦にもとづいてゐるし、その紀元は旧約聖書にある天地創造（紀元前三七六一年）である。また、キリスト教の復活祭はユダヤ教の過越<sup>すさご</sup>しの祭り<sup>\*15</sup>の時期にめぐつてくるが、それは春分の次の満月が過ぎた直後の日曜日と定められている。春分は太陽暦の節目であり、その点で復活祭はバビロニアの太陰太陽暦の痕跡を残しているといえる。

太陰太陽暦はむしろ中国文明圏とインド文明圏で絶大なる影響力を維持してきた。それは干支や星宿が付随していたからである。「暦」史上の革命はなかったが、改革はいろいろ起こりみられた。しかし、中国でもインドでも二〇世紀にはいると太陽暦に圧倒されていった。

アジアにおいて太陰太陽暦の引力圏から最初に離脱をはかったのは他ならぬ日本である。一八七三年の明治改暦で、日本は西洋文明のOSであるグレゴリオ暦に乗り換えた。「脱亜入欧」は「脱太陰太陽暦、入太陽暦」でもあり、文明的な決断にほかならなかつた。他の諸国も後につづいた。日本に併合された朝鮮では一九一〇年から、中国では辛亥革命を経て中華民国が成立した一九一二年からグレゴリオ暦が採用された。植民地となつた国や地域では西欧列強の進出とともにグレゴリオ暦の導入がはかられた。もつとも、フィリピンだけは例外で、スペインの支配下にあつたことから、それは一五八二年の改暦時にまでさかのぼる。

とはいえ、太陰太陽暦はしぶとく命脈を保ち続けている。ということとは、アジア諸地域の文明

\*14 バビロニアの影響を受けた太陰太陽暦で、新年が9月頃にはじまり、紀元前3761年を創世紀元とする暦。

\*15 モーセに率いられたユダヤ人のエジプト脱出を記念する春の祭り。春分直後の満月の晩に小羊を供え、共食する。

を理解するときには、太陽暦（グレゴリオ暦）と太陰太陽暦との関係がポイントとなってくる。

日本では明治初頭（一八七三）に廃止されたはずの旧暦（太陰太陽暦）が農山漁村では一九五〇年代まで生きていたし、月遅れの行事として今でも影響力をとどめている。<sup>\*16</sup> 中国文明の引力が相対的に強い奄美や沖縄では、今なお旧暦行事が形を多少かえながらも存続している。

韓国や中国では西暦の正月よりも太陰太陽暦の旧正月（春節）を盛大に祝う慣習がつついでいる。韓国、北朝鮮、中国、台湾のカレンダーには陰暦（農曆）がかならずといってよいほど小さく載っている。ただし、そのあつかいは副次的であり、その逆、つまり陰暦を主としているカレンダーは見たことがない。

ベトナムでも日めくりには陰暦が載っているが、かつては中国と同じだったものを一九八五年からベトナム独自のものにかえている。その結果、テトとよばれる旧正月が中国とくらべると一日（たとえば二〇〇七年）、あるいはほぼ一か月（たとえば一九八五年）はやくなったりしている。

どの国においても一般に都市部で太陽暦が先行して浸透し、農村部では依然として古来の太陰太陽暦にたよる生活がつづいてきた。都市部においても、労働は西暦でも行事は旧暦というような分業体制がみられる。このように文明の構成にあたって、ふたつの暦法が主／副、都市／農村、労働／行事といったちがいはあっても、それぞれに関与しているのである。

南アジアの太陰太陽暦も強靱な粘り腰を発揮している。インド、ネパール、スリランカでは新年は四月の中旬に祝われ、ひと月は白分（はくぶん）（新月から満月）と黒分（こくぶん）（満月から新月）に分けられる。しかも、太陽月（太陽年を一二分した月）と朔望月（新月から新月、あるいは満月から満月）が組み合わさるので、いっそう複雑である。

\*16 旧暦と新暦のおりなす対抗関係については、次の拙稿を参照されたい。中牧弘允「生活のなかの宗教」井上忠司編『現代日本文化における伝統と変容4 都市のフォークロア』ドモス出版、1988年、77-91頁。

\*17 星宿とは月や太陽の背景にある恒星のまとまり（宿）をさし、恒星年とは同一の恒星に回帰する「年」のことである。

インド政府は一九五七年に国定カレンダーを制定し統一をはかったが、いまだに十分なる普及をみていない。それほど人びとは言語ごと、地方ごとに微妙に異なる太陰太陽曆に親しんでいるのである。複雑さにさらに拍車をかけているのは星宿（二十八宿）や恒星年（一十二宮）のシステムである。そのために占星術が発達し、欠日（とばす日）や余日（繰り返す日）などが必要とされ、さまざまな調整がはかられている。

インドの曆法が伝播したビルマ（ミャンマー）、タイやラオスなどでも陰曆がいまなお隠然たる役割を果たしている。たとえば雨安居うあんじょで知られる三か月間、出家者は僧院で修行にはげみ、在家者も結婚や引越しなどを避ける。ビルマでその雨安居がはじまるのはワゾー月（七月）の満月の翌日からである。

このように太陰太陽曆はアジア全体で現役の曆として機能しつづけている。インドや中国の文  
明圏だけではない。チベット仏教の伝播したブータンやモンゴルでも「チベット曆\*18」とよばれる太陰太陽曆が欠かせない。もしアジアなるものが統合をめざすとすれば、太陰太陽曆はその有力なツールになりうる。いまは太陽曆と太陰曆のはざまで逼塞しているが、EUならぬAUが構想され、アジアのアイデンティティなどというものが問われるとき、その潜在的ソフト・パワーに注目が集まらないともかぎらない。ただし、ばらばらな陰曆をどう統合するかがひとつの大きな課題であり、マレーシアやインドネシアのようにヒジュラ曆を日常の生活曆としてつかう国々とう調整するかはもうひとつの重要な課題となるであろう。

実際、太陰太陽曆≡旧曆の見直しはすではじまっている。日本における旧曆カレンダーの復活と、それにつづく静かなブームはそのひとつである。それはスローライフとか月の癒しなどに

\*18 タイやラオスなどの太陰曆で8月の満月の翌日から11月の満月までの期間（西曆では7月中旬頃から10月中旬頃）をさす。雨季にあたるため僧侶は外での活動をひかえ、寺院で集団の修行生活をおくる。

\*19 チベットで使われるインド系の太陰太陽曆。現行の時輪曆の紀元は西曆1027年である。

結びついているが、近代合理主義に代わるオルターナティブなライフスタイルが追求されていることは共通する。一例をあげるとすれば、NGO法人の大阪南太平洋協会が毎年発行する旧暦カレンダーがある（写真1）。一九八七年に旧暦主体で作成され、実用新案登録も済ませている。そこには旧暦による四季の見通しもついでいて、新暦（グレゴリオ暦）よりも季節のブレが少ないと主張されている。<sup>\*20</sup> それにつづくかのように、いまだに数十種類の陰暦カレンダーが市場にでまわっている。太陰太陽暦の命運は尽きていないどころか、これからさらなる巻き返しがあるかもしれないのだ。

### 三 市場競争の「暦」史——宗教上の葛藤と相克

#### 寡占のグレゴリオ暦の現在と未来

現代のカレンダーのなかで、独占的な地位を占めているのは太陽暦のグレゴリオ暦である。過激派と称されるイスラーム復興主義者たちが使用するカレンダーが純粹なヒジュラ暦かどうかは知らないが、イスラームのカレンダーでもヒジュラ暦だけのものは例外に属する。なぜなら、かならずと言ってよいほどに、ヒジュラ暦に西暦が併記されているからである（写真2）。

実際、グレゴリオ暦は地球時代の世界基準の地位をかためつつある。それは国が法律でさだめ

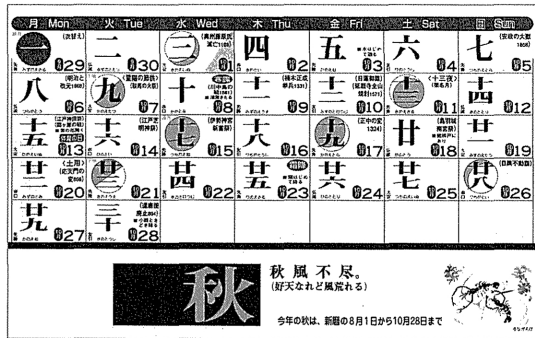


写真1 大阪南太平洋協会の旧暦カレンダー（旧暦2008年）

\*20 小林弦彦『旧暦はくらしの羅針盤』日本放送出版協会、2002年。松村賢治『旧暦と暮らす——スローライフの知恵ごよみ』ビジネス社、2002年。

るデ・ジュリ・スタンダードであると同時に、事実上のデ・ファクト・スタンダードとしても機能している。グレゴリオ暦が通用しない国や地域はほとんど存在しないといっても過言ではない。さらに、世界の大多数のカレンダーにはたんにグレゴリオ暦の年月日を記載するだけで、ことさら西暦とか西紀などと断っているものはすくない。もちろん、あとで見るように、グレゴリオ暦に他の暦法による日付を併記するバイカレンダー、マルチカレンダーはめずらしくないのだが。

他方、一見、グレゴリオ暦が独占しているようにみえて、じつは苦渋の選択をしているカレンダーがみつかった。ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボで入手したカレンダーがそれである(写真3)。それには日にちが週日は黒、日曜日は赤で印刷されていた。しかし、祝祭日の日付がまったくないのである。その理由は、国家が正式に祝日を決められな

るデ・ジュリ・スタンダードであると同時に、事実上のデ・ファクト・スタンダードとしても機能している。グレゴリオ暦が通用しない国や地域はほとんど存在しないといっても過言ではない。さらに、世界の大多数のカレンダーにはたんにグレゴリオ暦の年月日を記載するだけで、ことさら西暦とか西紀などと断っているものはすくない。もちろん、あとで見るように、グレゴリオ暦に他の暦法による日付を併記するバイカレンダー、マルチカレンダーはめずらしくないのだが。



写真3 ボスニア・ヘルツェゴビナのカレンダー(西暦2005年)



写真2 サウジアラビアの日めくり(ヒジュラ暦1425年)

\*21 宗教界やマスコミなどでファンダメンタリストとよばれる人びとは、イスラームの復興をめざすという意味でイスラーム復興主義者のほうがより適切である。



いことがひとつ。もうひとつは、対立してきたセルビア正教、カトリック、イスラーム、ユダヤ教の各宗教の祭日をバランスよく載せることができないからである。それぞれの宗教にもとづくカレンダーはもちろん出まわっている。しかし、商店や銀行などが広告入りで頒布するカレンダーには、国家的・宗教的な祝祭日は無用の摩擦をよぶので、ご法度となっている。結果として、日曜日だけが赤で表示されるカレンダーがひろく使用されることになった。紛争が宗教的な対立を激化させたボスニア・ヘルツェゴビナのようなところは、妥協でも折衷でもなく、デ・ファクト・スタンダードとして、グレゴリオ暦がその宗教色（＝祭日）をぬいて採用されているのである。

このことはボスニア・ヘルツェゴビナにおいては文明の衝突が戦争という事態をまねき、その戦後処理がまだ未完であることをしめしている。換言すれば、文明としての統合が不十分ということがある。バルカンはおおくの民族が融合しながら共生をはかっている混住地域から成り立っている。この一帯はオスマン・トルコの帝國的支配から脱し、民族自立の国家形成をはかる一方、国内にさまざまな民族問題をかかえてきた。ボスニアが属した旧ユーゴスラビアはその典型であり、カレンダーをグレゴリオ暦に一本化できない事情がいろいろはたらいっているのである。

バルカン問題から連想すると、ヨーロッパの統合をめざすEUが気にかかる。そこではトルコ加盟がおおきな課題となっているが、仮にそれをみとめたときには、イスラーム暦のあつかいが当然問題になるだろう。現在、トルコのカレンダーには西暦一本のものと、日めくりにみられるように西暦とイスラーム暦とを併記したものがある。他方、ドイツに住むトルコ人たちが使用するカレンダーやメモ帳は西暦を基本としながらイスラーム暦を載せている。そればかりか、後者にはコーランの一節が各頁に引用されていて、「トイレなど不浄のところに持ち込んではいけない」

\*22 中央アジアのソグド人が使用した太陽暦。30日ずつの12か月と5日からなる365日の一年を基準とした。

\*23 西洋天文学を暦算の基礎にすえた清朝の太陰太陽暦。モンゴルにも伝えられた。

と注意書きが添えられている。いずれにしても、EUにおいてイスラーム暦への顧慮がどのようなかとは文明的課題といえる。「暦」史上、凝視しなくてはならないポイントである。

### 暦法がしのぎをけずるユーラシア——地域を三分する暦

キリスト教とイスラームが混在するバルカンは両文明圏がせめぎあう地域である。他方、社会主義体制が崩壊した旧ソ連の中央アジア、ないしコーカサスからアフガニスタン、新疆をふくむ中央ユーラシアもまた暦法がしのぎをけずる地帯である。イスラーム以前には太陰太陽暦が優勢であったが、一部ではイラン系の太陽暦（ソグド暦）<sup>\*22</sup>が使用されていた。イスラーム化以降、ヒジュラ暦が宗教暦としては優勢となったが、季節を無視した暦法のため不都合もあり、農事や徴税にはイラン系の太陽暦や中国系の十二支を補完的に活用していた。モンゴル帝国の時代には十二支の紀年法が帝国の全域にひろまった。ロシア帝国による支配を受けた時期にはユリウス暦が普及し、ソ連時代にはグレゴリオ暦が採用された。他方、清朝の支配下にあった地域では太陰太陽暦（時憲暦）<sup>\*23</sup>が公式につかわれていたが、中華民国成立以降はグレゴリオ暦と民国紀元の年号も併用された<sup>\*24</sup>。

この地域でも暦法は民族、王朝、帝国、国民国家の盛衰と歩調を合わせて使用されてきた。しかも二重、三重に暦法や紀年法を併記して使用する例がすくなくなかった。たとえば、帝政ロシアと旧ソ連ではそれぞれユリウス暦とグレゴリオ暦が使用され、それに巻き込まれたイスラーム教徒は二重の暦をつかうこととなった。しかも、ベルシャのゾロアスター教<sup>\*25</sup>の伝統を継ぐ民族の場合、イスラーム化しても春分を年始とする太陽暦を併用していたので、三重の暦を使い分けてきたといえる。

\*24 年につける称号。元号ともいう。漢の武帝時代の「建元」にはじまり、日本では「大化」が最初の年号。

\*25 紀元前6世紀にゾロアスターが創始した古代ベルシャの宗教。善悪二元論を基調とし、善神の象徴である太陽や火を崇拝し、アヴェスタ教典を有する。

イランの場合、カレンダーは春分からはじまり、イラン太陽暦<sup>\*26</sup>、西暦、ヒジュラ暦が三層で併記されている（写真4）。とはいえ、それは平等のあつかいを意味しない。人びとは通常、イラン太陽暦で日常生活をおくっている。しかし、イスラームの宗教行事はヒジュラ暦でなされる。一方、西暦は諸外国との外交交渉や経済活動につかわれているにすぎない。

以上みてきたように、ユーラシアにおける暦の基本的な分布は三分される。まず太陽暦が優位を占めるキリスト教文明圏ならびにゾロアスター文明圏、つぎに太陰暦のイスラーム文明圏、それに中国、モンゴル、インド、ネパールなどの太陰太陽暦や干支・星宿の文明圏である。これら三者の宗教的ともいえる葛藤と相克がユニークな歴史をつくってきたが、二〇世紀にソ連と中華民国がグレゴリオ暦を公式に採用してからは、西洋文明の暦法が、宗教ぬきで「暦」史の表舞台に躍り出た。

こういなかで特記すべきは、ユーラシアの東端の島嶼部では、それに先立って、フィリピンでは一六世紀に、日本では一九世紀にグレゴリオ暦がすでに公的に採用されていたことである。

こうした三つ巴の構図に楔を打ち込んでいるのは紀年法である。天地創造から数えるユダヤ暦、神話的人物に紀元をもとめる「檀紀<sup>\*27</sup>」（檀君）や「皇紀」（神武天皇）、モンゴルの英雄をもちだす「チンギスハ

March/April 2005		فروردین ۱۳۸۴		صفر / ربیع الاول ۱۴۲۶	
۲۷ ۱۶ ۷	۲۹ ۱۹	۲۲ ۱۲	۶ ۲۶	شنبه	
۲۸ ۸	۲۱ ۱۱	۱۴ ۴	۷ ۲۷	یکشنبه	
۲۹ ۱	۲۲ ۱۲	۱۵ ۵	۸ ۲۸	دوشنبه	
۳۰ ۱۰	۲۳ ۱۳	۱۶ ۶	۹ ۲۹	سه شنبه	
۳۱ ۲۰	۲۴ ۱۴	۱۷ ۷	۱۰ ۳۰	چهارشنبه	
۱ ۲۱	۲۵ ۱۵	۱۸ ۸	۱۱ ۳۱	پنجشنبه	
۲ ۲۲	۲۶ ۱۶	۱۹ ۹	۱۲ ۳۲	شنبه	

写真4 イランのカレンダー（イラン暦1384年）

\*26 イランやアフガニスタンでもちいられる太陽暦。正式にはジャラリ暦といい、1079年から施行された。春分を新年とする。ジャラリ暦紀元はムハンマドの聖遷を元年とする太陽暦計算の紀年法。

\*27 朝鮮最初の王とされる檀君が即位した年（紀元前2333年）を紀元とする紀年法。1948年から1961年まで檀紀が公用年号であった。

ン暦<sup>\*28</sup>、中華民国成立を重視する「民国暦」<sup>\*29</sup>、金日成の誕生日を起点とする「主体紀元」<sup>\*30</sup>など、枚挙に暇がない。天皇の在位で数える元号を採用している世界唯一の国、日本も独自性を保持している。

地球時代の世界標準の地位にもっとも近いのは太陽暦のグレゴリオ暦である。それに対抗する勢力としては太陰暦のイスラームが隠然たる存在感を刷り込んでいる。イスラーム教徒が多数派を占めるインドネシアでは、グレゴリオ暦とヒジュラ暦の併記がふつうのカレンダーの特徴である。しかし、バリ島では「カレンダー・トレランシ（寛容な暦）」とよばれ、各種の暦法や紀年法を満載した複雑なカレンダーが発行されている（写真5）。そこには一〇種類の異なる日数から構成される週が記載されると同時に、一年二一〇日周期のバリ暦、ジャワ暦、シヤカ暦、仏暦、孔子紀元、干支、はては皇紀や平成まで載っている。

まさに宗教や異文化に寛容なカレンダーである。同時に、三年ほどの日本によるインドネシア占領の歴史までが暦に刻まれている。

他方、太陰太陽暦はBRICsの一員に数えられる中国とインドでもその勢力の温存がはかられている。中国に進出した日系企業も最近では農

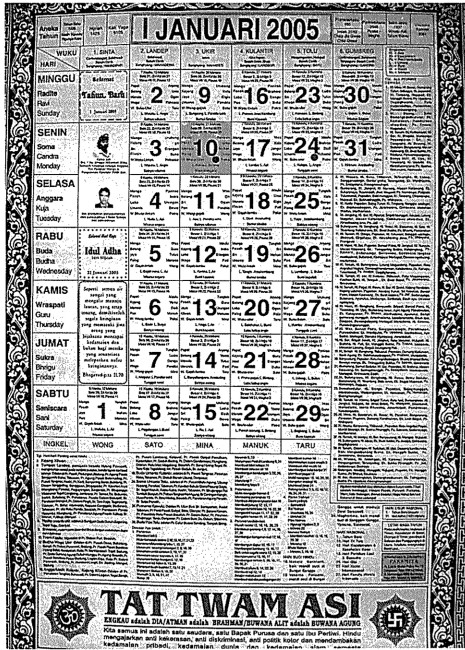


写真5 バリのカレンダー（西暦2005年）

\*28 テムジンがモンゴルを統一しチンギスハーンを名乗った1206年にちなむ暦。  
 \*29 中華民国成立の1912年を紀元とする暦。  
 \*30 北朝鮮の金日成主席の誕生日（1912年）を紀元とし、主体思想を顕彰するところの紀年法。1997年に制定された。

暦をふくむ西暦カレンダーを得意先にくぼるようになっていく。シンガポールに目を転ずると、西暦、ヒジュラ暦、タミル暦<sup>\*31</sup>、中国農曆<sup>\*32</sup>の四種類が記載されている(写真6)。このように太陽暦、太陰暦、太陰太陽暦の三つ巴の「暦」史は予断を許さない状況にある。

### 多彩で柔軟な暦——伝統文化のエスニック・カレンダー

最後に、ユーラシア以外の大陸や地域にもふれておかねばなるまい。まず南北アメリカ大陸では前コロンプス期のマヤ、アステカ、アンデスの暦法は実効性をうしななって久しい。かわつてユリウス暦やグレゴリオ暦が暦法の基軸となってきたが、伝統行事などはそれに取り込まれるかたちで継承されている。ユーラシアにくらべると西暦で一本化している度合いがたかい。

アメリカ合衆国でレギュラー・アメリカン・カレンダーと称されるふつうのカレンダーには、ユダヤ教の大贖罪日(ヨム・キプール)や元旦(ロシユ・ハシヤナー)の記載はあっても、イスラームの断食月ラマダーンは載っていない。レギュラー・アメリカン・カレンダーにラマダーンが表示されるのであれば画期的であり、注目に値する。一方、アフリカン・アメリカン向けのカレンダーは大量に発行されているが、暦法自体はグレゴリオ暦である。これに対し、多様な暦法が載っているエスニック・カレンダーもそれぞれの民族集団に出まわっているが、発行部数は微々たるものである。オセアニアもアメリカと似たような状況である。先住民の暦法がグレゴリオ暦やヒジュラ暦に対峙することはない。ニュージールランドのマオリやオーストラリアのアボリジナルが使用するカレンダーはグレゴリオ暦が基本である。一方、近年の移民が持ち込んだヒジュラ暦やヒンドゥー暦はグレゴリオ暦と併用されながら普及している。欧米の列強による植民地化はグレゴリオ暦を

\*31 インド東南部のタミル人の間で使われている暦。

\*32 中国の太陰太陽暦の別称。陰暦ともいう。

\*33 塩田光喜「ニューギニアの生活暦」小島麗逸・大岩川嫩編「こよみ」と「くらし」——第三世界の労働リズム」アジア経済研究所、1987年、234頁。

世界標準に押し上げた。もっとも、ニューギニアの高地ではグレゴリオ暦はクリスマスと7曜に特化して受容されたとの報告がある。<sup>\*33</sup>前者は都会にでた若者が村に戻ってくる時節として、後者は給料をもらったり教会に通ったりする曜日として普及した。

アフリカではユーラシアと同じく三分する暦の伝統がある。といっても組み合わせは異なる。太陽暦の伝統はキリスト教のコプト暦<sup>\*34</sup>やエチオピア暦<sup>\*35</sup>に継承されている。エチオピア暦では西暦七年がキリスト生誕紀元で、二〇〇八年九月一日があらたな二〇〇〇年紀のミレニアムの開始となった。他方、東ローマ帝国の版図となったエジプトなどではユリウス暦がつかわれていた。しかし、イスラーム勢力が北アフリカをおおい、東アフリカの海岸部にも拠点を築いていくにつれ、ヒジュラ暦も同時に普及していった。そこにスペイン、ポルトガルを筆頭に西欧諸国が押し寄せてくる。いわゆる大航海時代の幕開けである。それにともなつてグレゴリオ暦(当初はユリウス暦)とヒジュラ暦の対立が激化する。現状では、タンザニアのカレンダーにみるように、グレゴリオ暦が主で、副次的にヒジュラ暦も記



写真6 シンガポールのカレンダー（西暦2004年）

\*34 コプトはエジプトの意味で、キリスト教徒が使用する太陽暦。年初が9月11日か12日で、1年は30日の12か月と5日の余日とからなる。

\*35 エチオピアでつかわれる太陽暦。コプト暦に準じる。

載したカレンダーが発行されている（写真7）。

\*

以上、「暦」史観のスケッチを提示することで、地球時代の文明学にむけて、ひとつの手がかりの開発をこころみた。暦法は基本的に太陰暦、太陽暦、太陰太陽暦の三種である。文明史としての「暦」史も三つ巴の様相を呈している。そこには革命とよべるような変革が二度おこった。ユリウス改暦とヒジュラ暦の採用である。しかし

現在、市場競争で優位に立っているのはバ  
ージョン・アップしたユリウス暦であるところのグレゴリオ暦である。とはいえ、ヒジュラ暦の抵抗と太陰太陽暦の巻き返しは十分に予測されるところであって、今後の動向が注目される。



写真7 タンザニアのカレンダー（西暦2004年）